創刊のご挨拶

平成３０年春、多くの方々のご尽力により、光雲寺において越智氏奉賛会を立ち上げることができました。

それからおよそ一年におよぶ奉賛会の活動が結実し、待望の会報誌『おちさんの風』発刊のはこびとなりました。

当山住職として、紙面をお借りし、お力添えいただいた皆様に心から感謝申し上げます。

現在、奉賛会では、中世大和国の歴史を学ぶ輪を広げつつ、激動の時代を生き抜いた越智氏に光を当てるために、さまざまな活動を計画しております。

この会報誌を皆様の手で育てていただき、大和の地に爽やかな「越智さんの風」が吹き渡るならば、これに過ぎる喜びはありません。（関　光徳）

平成３０年度活動報告

３／３０（金）
光雲寺にて越智氏奉賛会設立集会を開催、三役選出。
会長・米田徳七郎　副会長（２名）・吉村茂彦、吉田浩司

４／１２（木）
①役員人事決定
理事（３名）・浅見　潤、吉村基男、関　光徳住職　監事（２名）・湯川康治、半田　弘事務局（２名）・関　光徳住職、関　ゆりか（以上敬称略）
②５／６開催の「越智氏追善法要」「越智氏ご廟所擁壁工事竣工記念法要に関する打合せ

５／６（日）午前１０時
本堂にて越智氏追善法要厳修、次いで、越智氏ご廟所擁壁工事竣工に伴う墓前回向を、寺役員と奉賛会役員参集のもと無魔円成する。奈良新聞取材。

５／８（火）
趣意書を兼ねた奉賛会入会書を作成。全役員に渡し、会員勧誘活動を開始。

５／２５（金）
第一回奉賛会役員会開催
議題１　高取町長と御所市長の表敬訪問について日程調整。
議題２　奉賛会の年間活動について
議題３　今年より、高取町の夏まつり実行委員会が開催するイベントに参加することに決定。「おちさんの夜灯り」と題して境内をライトアップし、御本尊開帳・夜間拝観・スタンプラリー台の設置・方丈におけるお抹茶接待等を行う。開催日は毎年８／２８とする。

６／１０（日）午前
近鉄グループホールディングス（株）近畿文化会一行様４０名来寺。〝高取・大淀の仏像講座〟をテーマに当寺の文殊菩薩を拝観。住職不在につき、米田会長と吉村副会長に挨拶と拝観案内をお願いする。

６／１１（月）
※奉賛会会長以下５名の役員が高取町役場・植村町長を表敬訪問。
本会設立の報告・趣意説明を行い、当会の名誉顧問に就任していただく。

※寺にて夏まつりへおちさんの夜灯り〉について打合せ。

７／４（水）
※奉賛会会長以下５名の役員が御所市役所・東川市長を表敬訪問。会発足に至る経緯の報告を行い、当会の名誉顧問に就任していただく。
※寺にて打ち合わせ。
現在、大阪を中心に「ＮＨＫの大河ドラマに楠木正成公を」という誘致運動が展開されているが、越智氏は楠木氏とも深いつながりがあり、奉賛会の活動方針とも合致しているので運動に協力する方向で進める。

８／２８（火）
〈おちさんの夜灯り〉
高取町夏まつりに参加。スタンプラリーセット・灯火用カップ１００個セット・ライトアップ用の投光器セット・方丈にてお茶席を用意。吉田副会長にあってはプロジェクションマッピング・音響設備をセットアッ

プ頂く。
来場者数は２００人強。
１０／７（日）越智氏ご廟所に米田会長より寄進の玉垣と災害復旧記念碑を石材店設置。
１０／１４（月）光雲寺山門落慶・境内地修復記念法要執行。式典の記念講演を、奉賛会の理事で三光丸クスリ資料館館長の浅見潤様にお願いする。
１１／１３（火）黄檗宗管長近藤博道猊下が光雲寺に巡錫され、会長以下役員メンバー来寺頂きご親教を拝聴。

１２／１４（金）
米田徳七郎会長と新年度の運営指針に関する打ち合わせ。
平成３１年　１／１９（土）
第二回役員会開催
議題　新年度の活動指針５項目を検討
３／２４（日）開催の歴史講演会『大和の中世は面白い』への後援を決定。

平成３１年度の活動予定

春　５月６日（月）
〝おちさんの集い〟（総会・歴史講演会＝シリーズ「大和の中世は面白い」）
夏　８月２８日（水）
〝おちさんの夜あかり〟夜間拝観・ライトアップ・お茶席
秋　１０月～１１月頃
フィールドワーク　中世の遺構巡り
（以上事務局より）

梅原　猛先生を偲んで

梅原先生と拙僧の出会いは、今から十三年前の平成十八年九月九日で、今でも鮮明に覚えています。昼前でありましたか、秘書（三十年間お仕えし、先生をして『巫女』と言わしめた）の西川照子様より電話を頂き、フィールドワーク先の談山神社から光雲寺に伺いたい旨の連絡があり、十五時頃先生・西川様・角川学芸出版社の高橋様の三人で来寺されました。
当時浅学非才の拙僧は、先生がどのような方かまったく存じ上げませんでした。来寺までに急きょ、先生の略歴を調べたところ、知れば知るほど恐れ多い方だとわかり、どう接待すれば良いのか、家内とともに慌てふためいたものでした。
ところが、お会いした先生は想像とは違い、温和で人を包み込み、引き寄せるような魅力を感じる方でした。とても不思議な雰囲気でした。

梅原先生と越智観世

梅原先生が当寺を訪問されたのは、国立能楽堂開場三十周年及び世阿弥生誕六百五十年を記念し、新たに書き下ろしたスーパー能『世阿弥』制作のためでした。
能楽大成者・世阿弥の長子であり、三代目観世太夫を継いだ天才的能作家・元雅と、その弟元能（もとよし）、金春禅竹（こんぱるぜんちく）に嫁した娘の兄弟達が、最大の庇護者であった室町幕府三代将軍足利義満没後、父と共に圧迫をうけて逃れ住んだのが、豪族越智氏が治める大和国越智の里でありました。やがて越智氏庇護のもと、その芸は遺子に引き継がれ、越智観世として独自の活動を展開し、興福寺にて薪能（たきぎのう）を演じるなど歴史に名を残していきました。
方丈でお茶を召し上がっておられたとき、西川様が「先生には今、世阿弥が憑依しているんですよ」と微笑みながらおっしゃいました。米寿を迎えられた先生に世阿弥が乗り移り、あたかも夢幻能のようにシテとなりワキとなりアイとなって世阿弥親子の情愛を描かせようとされていたのでしょうか。

先生は元雅に関する私の拙い意見にも優しく頷き、共感してくださいました。そして、「元雅のお墓はこの地にあるのではと思う！どうか探し出してほしい！」とおっしゃいました。まるで世阿弥が我が子の不遇を憂い弔うため、そう述べておられるようで、不思議な時空に身を置いているような気がして、とても心が安らいだことを覚えています。
来寺記念として、先生に一句を頂きました。その歌が『元雅の　魂のさまよう　越智の里』です。この日の出会いは、拙僧にとってかけがえのないものとなり、今まで以上に越智氏が係わる中世史や能楽・観世元雅のこと等を一生懸命勉強するようになりました。そして、その頃から光雲寺住職として己が志すところの信念が明らかになっていきました。
爾来、毎年二月十一日に行われる当山恒例の星祭り・厄除のご祈祷法要厳修後に、祈祷札をお送りし、お守りとしてお傍において頂いていました。
また、拙僧の師匠の助言により、お会いした年の十月に、先生の句碑を境内に建立させていただきました。後日ご報告すると大層お慶びになられ、ありがたいことに、平成二十年五月四日、再び西川様らとご来寺されました。句碑の横で記念撮影をし、先生から心温まるお言葉を頂くことができました。
その後、平成二十五年にスーパー能『世阿弥』が全国公演されるまで、先生は精力的に活動を展開されました。その間、先生や西川様からいただいたご縁のおかげで、観世流二十六世家元・観世清和様、能楽大倉流小鼓方大倉源次郎様をはじめ、多くの方々と一期一会をいただくことができました。
これもひとえに、越智氏の菩提寺・光雲寺が大和の中世史において、たいへん重要な役割を担っているからだと思います。

人生の師は二人

人生とは〝良き師を求め、教えを仰ぐこと〟だといいます。私には人生における師が二人おられます。まず一人目は仏道を歩ませていただくための大事な教えを頂いた父であり、師匠の俊道廣傳禅師です。護持すること・法灯を絶やさぬよう、どんなことがあっても守り抜くことを叩き込まれました。

二人目の師は梅原先生です。先生はイデオロギーを嫌い、学問を愛する人生を極めて「梅原日本学」を大成されました。先生曰く「文化創造はほんの少しの勇気と理性を持って考えることが必要であり、頭が良いとか悪いとかは関係ない」と。若者は大いに日本の歴史・文化を学ぶことが大切であると説かれます。私は先生から歴史を学び顕彰していくこと、そして勇気をもって努力することが大切であると教えて頂きました。

平成最後の年、一月十二日、先生は九十三才のご長寿を全うされました。私にとって先生とのお別れは痛恨断腸の極みでした。

しかし、今になってはっきりとわかったことがあります。拙僧の前に現れた先生は確かに平成の世阿弥であったのだと。そして、先生に乗り移った世阿弥が、悲劇の死を遂げた元雅や、子達の菩提を弔わんがために、中世大和を生き抜いた元雅と越智氏を顕彰してほしいと願われたのだと。

先生との邂逅に先立ち、師父は苦節三十年大悟徹底し、平成五年の開創六五〇年大遠諱にあたり、寺の本堂をはじめ伽藍の整備に尽力し護持され、平成十四年、拙僧に生死一大事の法を伝授されて住職を譲られました。

そして、それから間もなく、梅原先生との出会いにより、歩む道が明確になり志を立てることができました(四十にして惑わず！)。そして志の機が熟し、昨年の平成二十九年、師父から私と二代にわたる念願にご賛同とご理解を頂き、米田徳七郎様を会長に仰ぎ同志の役員理事の皆様のご協力を得て越智氏奉賛会の立ち上げ、共に活動を展開することとなりました。

つまり、師父・拙僧には歴代住持の祖師が憑依し、寺の歴史や縁起の伝承のために、世阿弥親子が梅原先生に憑依し、南朝忠臣として大和の中世に活躍した越智一族は越智氏奉賛会関係各位に憑依し、それぞれが三位が一体となって、大願を成就なさしめたのではなかろうかという結論を導いたのです(五十にして天命を知る！)。

最後になりましたが、梅原先生本当にありがとうございました。この世では先生のお姿を拝見することができなくなりますが、拙僧の心の中では今、この瞬間も生き続け、勇気を与えてくださっています。お蔭様で拙僧は、人生をかけて心を寄せる大事なものを見つけました。乱文何卒お許し下さい。

梅原先生のご冥福をお祈りいたします。

拙僧、先生の『霊が　ふるふる　受けとめよ』確かに拝受致しました。

南無阿弥陀佛
阿弥陀佛
合掌

(光雲寺住職　関光徳)

大和の中世は面白い　ドラマの主役は誰か？

今、巷では応仁の乱が大ブームとなり、書店に行くと、応仁の乱をテーマにした文庫本や単行本、大型ビジュアル本などが目立つ場所に並んでいます。

ブームの先駆けとなったのは呉座勇一氏の『応仁の乱』(中公新書)で、戦乱に至る複雑な経緯や戦いの経過をわかりやすく解説していると評判です。とりわけ、南都興福寺の僧、経覚(きょうかく)と尋尊(じんそん)の視点から見た大乱という、斬新な切り口も好評です。

興福寺といえば、越智氏や筒井氏、古市氏などの大和武士たちはみな、興福寺や春日社の軍事・警察部門として機能していたこともあり、応仁の乱が長期化するにつれて彼らも東軍か西軍のどちらかに味方せざるを得ず、大和国も戦乱の渦に巻き込まれていきます。まさに今、「大和の中世は面白い」というわけです。

ところで、大和国を舞台に、南北朝時代から応仁の乱、そして戦国時代へと続く壮大なドラマを考えるとき、欠かせないのが越智氏とその宿敵・筒井氏の動向でしょう。本稿では、両者の関係を見ながら、彼らが大和国でどのような役割を演じたのかを概観してみたいと思います。

越智氏は春日社の白衣神人(びゃくえじにん＝下級神官)で、国民と呼ばれた俗体(ぞくたい)の武士でした。一方、筒井氏は古市氏らとともに衆徒(しゅと)と呼ばれた興福寺の下級僧侶であり、髪を剃った法体(ほったい)の武士でした。

そもそも、藤原氏の氏神を祀る春日社と藤原氏の氏寺である興福寺は一体の存在であり、越智氏、十市氏を代表とする国民も興福寺に従属していました。ただし、国民は衆徒に比べて興福寺からの自立性が強かったようです。

越智氏と筒井氏の抗争

では、なぜ越智氏と筒井氏は長年にわたり宿敵関係にあったのでしょうか。これは、単に国民と衆徒という立場の違いだけでは説明がつきません。

南北朝時代、興福寺は全体として室町幕府寄りであり、北朝方に味方する立場でした。

しかし、高市郡、宇智郡、吉野郡、宇陀郡一帯の武士たちは、

興福寺の影響力が比較的弱かったこともあり、大方は後醍醐天皇の南朝方につきました。

高市郡で勢力を拡げ、**散在党**と呼ばれた武士団の頂点に立つ越智氏は、必然的に南朝方の旗頭を務めることになります。

鎌倉時代から南北朝初期における筒井氏の動向は不明ですが、南北朝後期に入り、**乾脇（いぬいわき）党**と呼ばれた武士団の中で筒井順覚が台頭し、やがて室町幕府第三代将軍、足利義満の援護もあって興福寺の衆徒に取り立てられ、北朝方のトップに躍り出ました。

こうして越智氏と筒井氏は宿敵関係となり、互いにしのぎを削り合うようになります。

やがて南北朝時代が終わり、時を経て京都で応仁の乱が勃発すると、越智氏は河内国守護・畠山持国との旧縁から、持国の子・畠山義就（よしひろ）が味方した西軍側につきました。一方、筒井氏は、義就と畠山家の家督争いをしていた畠山政長（持国の甥）に味方し、政長とともに東軍の一員として戦いました。

またしても、越智氏と筒井氏は敵味方に分かれて争うことになったのです。

京都で始まった応仁の乱は、畠山氏、斯波氏の家督争いに加え、細川氏と山名氏の勢力争い、室町幕府の後継者問題などが複雑に絡み合い、各地の守護大名や国人たちをも巻き込む全国的な争いに発展していきました。国民・越智氏と衆徒・筒井氏は大和武士の中でも抜きんでた力を持っていたため、冒頭で述べたように、大和武士たちも二分されて戦乱に巻き込まれていったのです。

その後、応仁の乱は長期化し、両陣営に厭戦気分が蔓延。決着がつかぬまま京都を灰燼に帰しただけで終結しますが、越智氏と筒井氏はなおも対立し続けました。

勝者は誰か

まさに応仁の乱のさなか、越智家栄（いえひで）が当主であった頃に最盛期を迎え、一時は筒井氏を圧倒して優位に立った越智氏でしたが、家栄の没後は細川氏、楢原氏、玉手氏、布施氏の人物が惣領となるなど次第に弱体化していきました。

最終的に越智氏は筒井氏によって滅ぼされ、筒井氏はその後もしたたかに立ち回って生き延びたものの、結局は時代の波に翻弄され、飲み込まれてゆく運命をたどります。

自己の信じる道を突き進み、ある時は弱者に味方し、強大な権力に真っ向から歯向かったが故に滅んだ越智氏。

それとは逆に、常に時勢を伺い、興福寺や室町幕府、畠山、三好、織田信長そして豊臣秀吉と強き者に付き従い、その力を利用して乱世を生き抜こうとした筒井氏。

どちらの生き方が正しかったのか？どちらが真の勝者なのか？筆者にはまだその答えが見出せていません。

しかし、善悪はどうあれ、当時の武士たちにとって家名の存続こそが何よりも重要な命題であり、そのために必死で戦い、策略を用いたのでしょう。

次回からは時を鎌倉時代までさかのぼり、越智氏の出自について再検討を加えつつ、越智党と呼ばれた武士団の発生と消長、そして彼らが中世大和国という、歴史の舞台において演じた役割を明らかにしていきたいと思います。

（浅見　潤）

おちさん草木記
「厄除けの杉」

曽我川沿いの道を東に入ると、すぐに美しく掃き清められた参道の入り口で参詣者を迎えてくれるのが「厄除けの杉」として、近郷の人々から信仰を集めているご神木である。

幹周り5・2メートル、高さ15メートル、推定樹齢七百年で、この地の領袖越智氏一族の盛衰とこの地の歴史を見守ってきた。

昭和50年代頃から環境変化の為か樹勢が衰え、枯死寸前になったが、二世の木が寺で順調に育って来た頃から親木が元気を取り戻し、葉を茂らせる様になったという。

現在主幹は頂上で僅かに葉を残すだけになり、枯れた枝の殆どが刈り取られたが、横に伸びた一本の枝だけが健在で、すくすく育ち主幹に負けない程の高さになり、生命力の強さに感心させられる。

刈り取られた大きな枝は長年の風雪に耐え、年輪は緻密で銘木の為、再利用を検討され「厄除け念珠」として生まれ変わっている。

（吉村基男）

編集後記

奉賛会員諸氏のご協力と事務局の奮闘により、このたび発刊の運びとなりました。皆様に感謝申し上げます。

ところで、会報の名称**「おちさんの風」**はご住職の命名です。

金剛葛城山系と白い雲、青い空を背景に、涼やかに吹き渡る一陣の風。

幾多の武士たちが戦い、栄枯盛衰を繰り返した中世大和国にあって、あだ花のごとく美しく咲き誇り、儚く散った越智氏。しかし、その足跡は真っ直ぐであり、いさぎよささえ感じさせてくれます。

きっと越智さんも、この名前に満足していることでしょう。（編集子）